



上の写真は、震災ボランティア団体 こたレンジャー

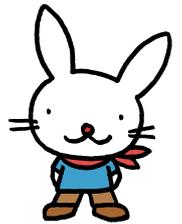
この号の主な内容

被災地の子どもたちへの支援活動 授業のスタート 総合演習	1
授業のスタート 保育内容演習 小学校教育実習を終えて	2
幼稚園教育実習を終えて 私たちの卒業論文への取り組み	3
学生時代の研究とサークル活動のこと 就職活動について サークル活動報告	4

●●● We Love こたつ

— 日本福祉大学 子ども発達学部ニュースレター —

第7号 2011年7月1日発行



被災地の子どもたちへの支援活動

○学生VOICE

藤田 真歩 (ふじた まほ) 子ども発達学科
初等教育専修 4年 愛知県/豊橋東高等学校出身

「こたレンジャー」は、子ども発達学科の4年生を中心に集まった、被災した子どもを支援するボランティア団体です。3月11日に起きた東日本大震災を受け、被災した子どもたちに様々な支援をするために発足しました。週に一



度、レンジャー会議を設け、自分たちに何ができるかについて、話し合っています。先日、各ゼミごとから集まったお金で、文房具や遊び道具を購入し、被災地に贈りました。被災地の方からは、「有効に使わせていただきました。ありがとうございます。」と、お返事が届き、少しでも協力ができたことを嬉しく思いました。これからも、長期的な支援をしていきたいと考えています。今後は、絵本の読み聞かせや、手遊びなどをDVDに撮り、贈ったり、ブログに掲載し、子どもたちの心のケアになるようなことをしていきたいと考えています。その輪を広げていくため、レンジャー通信や、ブログの更新を行っています。興味のある方は、メールをください。

アドレス→kotarennja@yahoo.co.jp に連絡をお願いします。

大学生としての授業のスタート 総合演習 (心理臨床学科)

○学生VOICE

笹尾 知可 (ささお ちか)
心理臨床学科 1年 愛知県/江南高等学校出身

子ども発達学部1年の授業の1つである、総合演習 I の紹介をしたいと思います。私たちのゼミ(クラス)では、自分が1番興味のある本を読み、それについてのレポートを書き、他のメンバーに発表する授業を行いました。私は、「障害をもつ子どもを産むということ」という本を読み、障害をもつ子どもを産んだ両親へのサポートがしっかりと行われていない現状を知りました。そこで私は、この現状を改善していくには、親のこころのケアや具体的な支援が大切だと考えました。また、自分の発表だけでなく、他のメンバーの発表を聞く事により、新たな発見や気付きを持って、よい授業でした。今は、各グループでテーマを決め、調査をし、研究

を進めています。総合演習 I は、少人数での授業です。よって、クラスにいる1人1人の意見や考えを知る事ができ、素晴らしい授業だと感じています。大学は高校と違い、自分の好きな事とことん学べる場だと私は感じています。



大学生としての授業のスタート 保育内容演習（子ども発達学科） ● 学生VOICE

池田 基恵（いけだ もとえ）
子ども発達学科 保育専修 1年 愛知県／桜花学園高校出身

大学に入学してから2カ月経つが、毎日の授業がとてものしく保育・子どもについて学べる喜びを感じている。高校までの自分は、勉強を「しなければならない」という気持ちと、ただ聞いて、書いて「覚えなくては」と思って授業を受けていた。しかし大学に入り、自分の好きな分野である「保育」「福祉」を学び、自分から「もっと知りたい、学びたい」という気持ちに変わっていた。

自分が本当に学びたいことを学んでいるという喜びと同時に、何でも積極的に学ぶことの大切さを学んだ。これから、もっとも自分が学びたいことを学べようと思ううれしく思う。将来、保育者になりたいという目標を楽しく学んで実現していきたい。

後藤 未来（ごとう みく） 子ども発達学科
保育専修 1年 愛知県／南山国際高等学校出身



この保育内容演習の授業では、「戦後保育実践のまなざし」と題して、年代ごとに発展していった保育実践がたくさん書籍紹介と共にまとめられた文献を、グループごとに、年代別に分け、発表し合っています。現在ある保育は、どのように

して形成されてきたのかを、日々、仲間と共に学び合っている授業なのです。授業では、発表者の発表内容に対して質問をしたり、評価をしたり、みんなで、その内容のテーマについて考えます。今まで知らなかった事に驚き、興味を持ち、少しずつではありますが、保育者と言う立場を意識しているところです。

横山 葉月（よこやま はづき） 子ども発達学科
保育専修 1年 長野県／上田東高等学校出身

この授業では、先生が一方向的に知識を教えてくれた高校までの授業と違って、「戦後の保育実践」の文献を元に、調べるテーマを

自分たちで決めて学習を進めていきます。さらに、ただ調べるだけではなく、調べたことを他の人に分かるように発表しなければならないので、とても頭を使います。

発表を聞く側も、発表者に質問をしたり、前回の発表の振り返りをしたりしなければならないため、きちんと発表を聞いていなければなりません。他の人の発表中も、常に頭を使わなければならないので、1時間終わると、どっと疲れる気がします。

しかし、高校までと違い、自分たちの調べたいことを調べられるので、どんどん「なぜ？」「どうして？」が浮かび、その分調べている内容も広がっていくので、とても楽しいです。先輩保育者の方々の貴重な実践記録に触れられるので、「自分も保育士になったらこんなことをやってみよう！」と意欲もわいてきて、ますます「保育士になりたい！」という気持ちも強くなります。

堀田 美希（ほりた みき） 子ども発達学科
保育専修 1年 富山県／富山南高等学校出身

高校の授業では、ほとんどが自分の席に座って、先生の話をしているだけでしたが、この授業では、友だちが調べてきたことや意見・考えなどを聞いて自分の意見との違いや新しい発見ができるとても意義のある授業だと思います。自分が発表する時には、グループで話し合っ、どうしたらわかりやすく伝えることができるのかや、面白く興味を引くための工夫を考えるなど、発表の準備をしました。これは自分が将来保育士や幼稚園教諭になったとき、子どもたちにわかりやすく、楽しく物事を教える時に必要な技術だと思います。また、この授業は自分たちで創り上げていくものなので、自分から友だちの発表をしっかり聞いて、学習していくことが大切だとわかりました。



小学校教育実習を終えて（子ども発達学科 初等教育専修）

中里 南子（なかざと みなこ） 子ども発達学科 准教授

子ども発達学科初等教育専修4年生は、4週間の教育実習を行いました。

4年生になるまでに学んできたことは、教育の理念や各教科を構成する学問の基礎、教科内容論、授業づくりや各教科の学習指導の理論と方法、学習指導案作成、模擬授業。そして各教科以外の教育活動の方法、子どもの見方などです。学生はこれらを、知識として学んだり、学習指導案を作成したり、模擬授業をしたりしながら学んできました。

また、2年生の時には、「教職インターンシップⅠ」という学校体験で、学校に行って、先生たちの仕事を見たり、手伝ったり、子どもたちと触れ合ったりすることをとおして、学校で仕事をするとはどういうことかを体験してきました。

いよいよ今回の教育実習では、補助や体験ではなく、教師として働くために必要な、学習指導、学級づくり、学校経営等にかかわる知識や技能を実際に学び、これまで学んできたことが、本当に身につけているかが試されました。

学生たちは、緊張した日々を送っています。睡眠不足と闘って、毎晩遅くまで授業の準備に取り組んでいる学生。指導案に苦労しながらも、子どもや実習先の先生方に支えられて、日々を過ごしている学生。一刻も早く最終日を迎え、再び授業を受ける側に戻りたいと願っている学生。児童と過ごす毎日がとても楽しく、このまま小学校に残りたい、と教師への夢と決意を強く再認識した学生。と、実習中の学生の思いはさまざまです。でも、みんな大学内の姿とは全く違って、「教師」の顔となり、子どもからのパワーをもらいながらイキイキとしていました。授業実践に苦戦しながらも、一生懸命教育実習に挑む、学生たちの授業風景です。



幼稚園教育実習を終えて (子ども発達学科 保育専修)

東内 瑠里子(とうない るりこ) 子ども発達学科 准教授

子ども発達学科4年生は、2011年5月30日から6月24日まで、幼稚園現場において、4週間の幼稚園実習を行いました。幼稚園実習は、まず3年生後期から4年生前期にかけて講義形式の授業「教育実習Ⅰ」において実習理論を修得します。そして授業「教育実習Ⅱ・Ⅲ」として、現場実習4週間を行うという流れです。ここでは、学生の現場実習の姿をご紹介します。

松崎可奈子(まつざきかなこ 子ども発達学科 保育専修 4年 愛知県/西尾東高等学校出身)さんは、西尾市立鶴城幼稚園において幼稚園実習を行いました。まず3週間は、5歳児クラスに配属され、子どもたちと関係を築きます。2週目からは毎日、短時間ではありますが、担任の先生に頼らず、自分ひとりで保育を行う責任実習に取り組みます。そして3週目の金曜日には、1日丸ごと自分ひとりで保育を行う一日責任実習に取り組みました。



一日責任実習では、午前中の設定保育の時間、「友だちと協力して遊びをすすめる。友だちを応援する気持ちを持つ。」ということをして「保育のねらい」にして、「ひっくり返しゲーム」に取り組みました。子どもたちは、いきいきと「ひっくり返しゲーム」で遊んでくれました。しかし、教師の関わりは、子どもがただ遊ぶだけではなく、その活動を通して、絵を描く楽

しみをどのように知ってもらおうか、数の数え方をどのように伝えていくか、など多くの指導法について考える必要があります。またここでは5歳児に対して、教師がどのように子どもに質問を投げかけ考えさせるか、どのように子どもの主体性を活かすことができるかなど、発達段階に応じた指導法が、今後の課題となりました。

最終週である4週目には、年中クラス、年少クラスに2日ずつ入り、年齢による発達の違いを理解しました。

梅田葉子(うめだようこ 子ども発達学科 保育専修 4年 岐阜県/長良高等学校出身)さんは、岐阜幼稚園において幼稚園実習を行いました。梅田さんは、幼稚園実習について「とても楽しいです。3歳、4歳、5歳と毎週違うクラスに入らせてもらい、子どもの発達の違いに気づき驚いています。この年齢では、これができるんだ、これはまだできないんだ、ということがよくわかります。1クラス30名の元気な子どもたちを前にして、3週目には声がかれて、でなくなり困りました。声だけで子どもを引き付けるのではなく、もっと子どもにとって魅力的な話ができるように、力をつけていきたいです。」と語ってくれました。



このように4週間という長期の実習だからこそ、段階を追って、幼稚園教諭の専門性を身につけていくことができます。

最後になりましたが、現場の先生方、ご指導ありがとうございました。

私たちの卒業論文への取り組み

学生VOICE

子ども発達学科 小林信次ゼミナール

椋原 陽子(かしはら ようこ) 子ども発達学科 初等教育専修 4年 愛知県/日本福祉大学付属高校出身

私の卒業論文のテーマは、「子育て支援の一環としての学童保育」です。

私は大学2年生から長期休暇に学童保育でのアルバイトを経験し、子育て支援の大切さを実感しました。そこで、指導員の仕事や子どもとふれあい、学童保育に関心を強く持ちました。卒論の副題として「～豊田市内の学童保育を事例に～」を設定し、地元である豊田市の成り立ちや子育て支援の始まりや現状、学童保育の取り組みや余暇活動、障がい(害)を持つ子どもの受け入れや関わりについて書こうと思っています。

そのため、豊田市の子育て支援センターや学童保育を訪問し、実際に行われている子育て支援や、所属している学童保育での実践をまとめたいと思っています。

また、学童保育士の資格を取得するにあたり、大府市の学童保育で実習を行う予定です。そこで、豊田市の学童保育との類似点や相違点に気づくと思うので、大府市の学童保育での実践も交えながら、進めていこうと思っています。

また、私が所属する小林ゼミでは、先生や仲間と内容を検討し、意見を出し合いながら、より良い卒業論文が書けるよう取り組んでいます。

心理臨床学科 小平英志ゼミナール

兵藤 栄里(ひょうどう えり) 心理臨床学科 4年 愛知県/桜丘高等学校出身

小平ゼミでは“パーソナリティと適応、心の健康”をテーマとしていますが、ゼミ生は、人の後悔の仕方、建前としての就職動機、さらには共依存やペットに対する態度など、様々なテーマで卒論に取り組んでいます。

私が研究しているのは、“空間の使い方の個人差”についてです。例えば、勉強のように集中力が必要な作業をする時、どのような空間を選ぶでしょうか。大抵の人は、一人だけになれる空間である「専有空間」を求めることが先行研究で示されています。しかし日常の中では、カフェやファミレスのように人が多く、専有空間ではない空間で勉強をしている人を見かけることは少なくありません。これらの人々はなぜカフェやファミレスのような集中するには不向きと思われる空間へわざわざ行き、勉強をしているのか、また、このような行動をとる人と、とらない人とではどのような違いがあるのかを問題意識とし、卒論を進めているところです。

梨井 美穂 (なしい みほ)

心理臨床学科 4年 富山県／八尾高等学校出身

私は現在、生命保険の営業職と有料老人ホームでの介護職の2種類の職種で内定をいただいています。就職活動を始めた当初は業種・職種共に決めておらず、そのために、できるだけ多くの会社説明会に参加しました。初めのうちからやりたい業種・職種が決まっている人も、色々な業種の説明会に参加したほうが周りの就活生から刺激をもらうことができるし、自分のやりたい仕事が明確になると思います。

また、避けることができないのが、面接です。面接は「いかに自分のことを伝えることができるか」が大切であるし、一番難しいことだと思います。面接では緊張はもちろん、言いたいことが言えないことなんて普通です。しかし、面接は回数を重ねるごとにうまくなっていきます。回数を重ねることで自信にも繋がります、気持ちに余裕も出てきます。

就職活動は諦めないこと、前向きにしていること、たまには気分転換もすること、早めの開始に越したことはありません。焦らず、じっくり進めていってください。

学生時代の研究とサークル活動のこと

勅使 千鶴 (てし ちづ)
子ども発達学科 教授



学生の時、『幼児保育史』の著者であり、ゼミの担当者でもあった古木弘造先生の影響を受け、「保育の歴史」を勉強しました。大学院では史・資料の探索でお茶の水女子大学付属図書館の倉橋惣三文庫に通いました。「探偵者」になった気分で資料を探していたことを思い出します。

その後、興味が広がり、「あそび」や「韓国の保育・幼児教育」の研究をしています。「現代を究明する」ため、歴史研究は今も続いています。

サークル活動も大切な学生時代の活動でした。児童文化研究会に所属し、人形劇づくりや地域の子ども会活動もしました。当時のサークルの友だちは、自分の大学だけではなく、全国の児童文化研究会へと広がりました。今、児童文化の間は「大切な財産」となっています。

サークル活動報告

●学生VOICE

吉田 龍宝 (よしだ りゅうほう)

心理臨床学科 1年 福井県／丹生高等学校出身

サークルは今、**バレーボールI部**に所属していて、中学1年生から今日まで続けています。活動は週に3回行い、基本的には自分たちで練習内容を決めて活動しています。けれども、練習自体がだらだらになったりすることはなく、集中して、主体的に活動しています。ですから、やらされているような感じが全くなく、大会で勝つことを目標にしている一方、純粋にバレーボールを楽しんでいる面もあります。

このサークルに入って大事だと思ったことは、やはり集中して取り組むことです。高校まではほぼ毎日練習があり、それほど思っていないかもしれませんが、週に3回しかない練習で技術力を上げるには、集中力が欠かせないと思いました。



集中して取り組めば、自然と楽しさも湧き上がってくるので、今後も意識しながら取り組んでいきたいと思っています。

森下 雄介 (もりした ゆうすけ) 子ども発達学科
初等教育専修 3年 愛知県／岡崎西高等学校出身



弓道部の男子は東海学生弓道連盟IV部リーグ、女子は同III部リーグに所属しています。日本福祉大学には弓道場がないため、武豊町の弓道場をお借りして練習しています。

私は、他の人と違い、猿腕(※)という腕で、弓を引く際に矯正をして引かなければなりません。そのため、肘に負担がかかることが多く、肘を痛め、上手いはず、弓道が嫌になったことも多々ありました。それでも弓道を続けているということは、やはり弓道が好きなのだと思います。

今は、ほぼ毎月昇段審査が行われています。4年生になれば忙しく弓道をしている暇がなくなりそうなので、この3年生のうちに四段を取得出来るように頑張りたいと思います。

(※)肘の可動域が広く、腕を真っ直ぐに伸ばしても真っ直ぐにならない腕のこと

藤間 水月 (ふじま みづき) 子ども発達学科 保育専修 2年 愛知県／日本福祉大学付属高等学校出身

こんにちは。私は**アカペラサークルFigaro**に所属しています。アカペラとは、楽器を使わずにリードボーカル、コーラス、ベース、ボイスパーカッションで作る声だけの音楽を言います。活動は主に他大学の大学祭やイベント、また他のイベントがあればバンドとして参加させてもらいます。本学でも年に何回かストリートライブをやらせてもらったり、夏にはサマーライブ、大学祭では2日間に渡りライブをやらせてもらい、その中で他大学のバンドの方に来てもらったりします。私はこのサークルで本学内以外に他大学にも交流の輪を広げることができました。歌でいろんな人と交流が持てることはとても素晴らしいことだと思っています。歌が好きの方、またアカペラに興味のある方はぜひ一緒に歌ってハモってみましょう。